別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　申旼正

申旼正氏の博士学位請求論文、「越境者のまなざし：芸術家の移動にみる韓国近代美術の形成」は、20 世紀前半の日本統治時代（1910～1945）において韓国近代美術、とりわけ韓国画壇において独自の油彩画が形成され、発展する過程を、朝鮮と日本の芸術家たちの移動というトランスナショナルな視点を通じて重層的に跡づけることによって、その歴史的、芸術的な意義を再評価した独創性の高い研究である。

韓国の近代美術は、その形成期が日本統治時代と重なったがゆえに、植民地の産物、西洋美術の亜流と見なされ、イデオロギー批判から実態の把握が困難になり、偏ったイメージに固定される時期が長く続いていた。しかしながら、著者は可能な限り先入観を排し、作品と関連資料を徹底的に調査することによって従来の研究を乗り越え、韓国近代画壇が西洋や日本と交流し、学びながらも、独自の成果を生み出したことを論証した。そのために設けたのが芸術家の移動という視座であり、著者は当該時期に活動した画家たちを、在朝日本人画家、東京に留学した朝鮮人画家、渡欧した朝鮮人画家という三つのタイプに大きく分け、代表的な人物に焦点を合わせて、越境がもたらすまなざしの変貌の様相を具体的に追跡していった。彼らの立ち位置を考察し、代表的な作品を周到に分析することによって、説得力のある歴史的な見取り図を打ち立てたのである。このような課題に取り組むために、著者は日韓のアーカイヴの資料をくまなく調査するとともに、ヨーロッパ（パリ、ベルリン、プラハ）でもオリジナル資料を博捜し、重要な新資料も発見した。移動する画家たちの作品と言葉に基づき、各々の現場で彼らがいかなるアイデンティティの基に、絵画で何を目指したのか、いかに表現したのかを、丁寧に読み解いていったのである。著者の新しいアプローチは韓国近代美術研究に確かな進展をもたらしたと言えよう。

本論文は、本編（本文、注釈、参考文献）と資料編（引用原文、図版目録、図版、参考資料）の２分冊から成る。本文は３部構成全７章から成り、序章、終章が加わる。以下、論文の構成に即して議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序章では、韓国における近代美術の過小評価という不幸な歴史、並びに先行研究とその限界を指摘し、グローバルな交流生成という視野の下、画家の主体性を重視することによって従前の研究を刷新しようとする本論文の目標を掲げた。その後、第１部「京城の日本人画家」では在朝日本人画家について論じるが、第１章「朝鮮へのまなざし」は、20 世紀初頭に朝鮮を訪れた日本人画家たちの活動、初期朝鮮画壇に対して彼らが果たした役割、「朝鮮美術展覧会」の創設などについて、高木背水の貢献や石井柏亭『絵の旅』、岡本一平「朝鮮漫画行」などを主に取り上げ論じている。

続く第２章「使命の美術」が扱うのは、戦前に徳寿宮・石造殿で展示されていた日本近代美術品、在朝日本人画家によって発刊された総合芸術雑誌『朝』である。前者の「李王家コレクション」は、日本の官展派巨匠たちの作品を近代洋画のカノンとして画壇に浸透させることに寄与し、後者の雑誌『朝』は短命に終わったものの、朝鮮に西洋美術を紹介する媒体として日本の『白樺』に比せられる役割を果たしたことが述べられた。

第１部の中核となる第３章「山田新一における美術の中心と周縁」では、これまで戦争

画収集の責任者というイメージに固定されてきた山田新一を、一人の芸術家として、在朝日本人画家の中心人物として全面的に再評価しようと試みている。朝鮮に渡ってからさらにパリに留学し、アマン＝ジャンの指導を受けて自己確立した山田は、帰朝後、朝鮮画壇の大御所として活躍する。美術に関して理想主義者たる山田が「地方色」には否定的で、「反ローカリズム」を主張した点を引き出したのは、本章の重要な貢献である。また、都城市立美術館が所蔵する膨大な原資料に依拠しながら、山田新一が政治状況と芸術的価値のはざまで《朝鮮志願兵》、《俘虜二人》といった含みのある戦争画を制作し、戦後に戦争画収集の任に当たる軌跡を冷静にたどってみせたことは、大きな評価に値する。

第２部「東京の朝鮮人画学生」では日本に留学した朝鮮人画家について論じる。最初の美術留学生として西洋画と出会った高羲東を取り上げた後、1920年代の図画教育、展示空間としての百貨店画廊や茶房について述べた第４章に続き、第５章と第６章で二人の異なるタイプの画家について詳述する。第５章「呉之湖における「朝鮮的印象」」は、東京留学によって東京美術学校で藤島武二から感化を受け、西田幾多郎の芸術思想に触れた呉之湖が生命主義に目覚める様を、呉之湖の言葉や芸術評論を丁寧に読解しながら分析した。帰国後、呉之湖がフィンセント・ファン・ゴッホに近い表現主義的な力動感を持つ朝鮮独自の風景表現を確立したことを明示し、印象主義の画家とは異なる呉之湖像を提起した。

第６章「李快大が描く「民族の歌」」は本論文の中核を成す。帝国美術学校に入学した李快大は、日本滞在中に《舞姫の休息》、《状況》、《運命》など運命に立ち向かう女性たちを描いたユニークな作品を発表するが、著者はダンサーの崔承喜に象徴される 1930 年代の日本に流布した朝鮮女性のイメージとの関連性を新たに指摘した。さらに、朝鮮が南北分断される時期に制作した《群像》連作４点が、ミケランジェロの壁画やロマン派画家たちの作品から学んだ古典的な群像構図とダイナミックな人体表現を駆使して、朝鮮の解放と和合をテーマとする骨太の寓意画になり得ていることを明確に論述している。

第３部「ヨーロッパに渡る朝鮮の芸術家」では、ヨーロッパに直接留学した朝鮮人画家について論じるが、第７章「境界の画家、裵雲成」で扱うのはこのタイプの５人の内で、特に優れた作品を残した裵雲成である。ヨーロッパに 18 年間滞在した裵は、そのほとんどを過ごしたベルリン時代に対照的な自画像２点や《家族図》など、民族的なアイデンティティの揺らぎを内包した作品を描くとともに、支援者と思われる三井男爵の肖像などを木版画で制作している。最後の３年間に滞在したパリにおける裵雲成の活動について新資料を基に解明したのは新たな寄与となった。終章では、越境者としての芸術家のまなざしをさらに精査し、韓国近代美術史の「現場性」を復元する課題を述べ、論文を結んでいる。

以上のように、本論文は停滞気味の感があった韓国近代美術研究に新次元を画する充実した成果をもたらした。研究の途上で遭遇したさまざまな障害、論じるべき課題の大きさや困難を乗り越えて、新しい見方や枠組みを提示し、新発見も含めた資料調査を貫徹し、斬新かつ的確な作品分析を行ったことは本論文の重要な成果と認められ、今後の研究への期待が審査委員から表明された。同時に、論文表題の不明瞭さ、資料操作上のミス、散見する誤字脱字などが問題点として指摘されたが、これらは本論文の学問的寄与を決して損ねるものではないこと、本論文を公表する前に修正すべきことが確認された。

以上の審査の後、審査委員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、申旼正氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。